

日本語テスト学会 (JLTA)

第9回全国研究大会(2005年度)プログラム

**The Ninth Annual Conference
of
The Japan Language Testing Association**

大会テーマ:「入学試験における言語テストのあり方」

Language Tests for School Admissions

日時: 2005年9月3日(土) 8:40 ~ 17:45

会場: 静岡産業大学情報学部(藤枝キャンパス)
(〒426-8668 静岡県藤枝市駿河台4-1-1)
TEL: 054-645-0191(代) FAX: 054-645-0195

日本語テスト学会 (JLTA)
The Japan Language Testing Association (JLTA)

事務局
〒389-0813 長野県埴科郡戸倉町芝原 758
TEL: 026-275-1964 FAX: 026-275-1970
E-mail: youichi@avis.ne.jp
URL: <http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html>

全国研究大会本部委員

Randy Thrasher (沖縄キリスト教学院大学・国際基督教大学名誉教授)
中村 優治 (慶応義塾大学)
中村 洋一 (常磐大学)
法月 健 (静岡産業大学)
島谷 浩 (熊本大学)

全国研究大会運営委員

法月 健 (静岡産業大学)
伊藤 彰浩 (愛知学院大学)
島谷 浩 (熊本大学)
中村 優治 (慶応義塾大学)
大坪 一夫 (麗澤大学)
片桐 一彦 (専修大学)
小山 由紀江 (名古屋工業大学)
塩川 春彦 (北海学園大学)
藤田 智子 (東海大学)
林 孝憲 (東京経済大学非常勤)
峯石 緑 (広島国際大学)
Soo-im Lee (龍谷大学)

全国研究大会実行委員

法月 健 (静岡産業大学)
島谷 浩 (熊本大学)
伊藤 彰浩 (愛知学院大学)

研究発表審査委員

中村 優治 (慶応義塾大学)
法月 健 (静岡産業大学)
伊藤 彰浩 (愛知学院大学)
島谷 浩 (熊本大学)

第 9 回 大 会 プ ロ グ ラ ム

9月2日(金)

17:00 ~ 18:30 理事会 (藤枝エミナース 桂の間)

9月3日(土)

8:40 ~ 受付(情報センター棟4階 ウィステリアホール前)
(PC利用発表者:発表教室で機器接続確認)

9:10 ~ 9:25 開会行事(情報センター棟4階 ウィステリアホール)

総合司会 法月 健(大会運営委員長・静岡産業大学)

挨拶 **Randy Thrasher** (JLTA 会長・沖縄キリスト教学院大学・
国際基督教大学名誉教授)

山田 登(静岡産業大学情報学部学部長)

9:30~10:55 研究発表(発表30分, 質疑10分) 発表 I 9:30 ~ 10:10
発表 II 10:15 ~ 10:55

A室(2102教室) 司会 浪田 克之介(北海道情報大学)

[1] 発表 I Increasing the Relevance of the TOEIC Scores to the School Curriculum
Soo im Lee (Ryukoku University)
Kiyomi Yoshizawa (Kansai University)

[2] 発表 II Clothes Make the Man (A Viewpoint of a Lifelong English Learner)
Michihiro Hirai (Kanagawa University)

B室(2202教室) 司会 島谷 浩(熊本大学)

[3] 発表 I リスニング評価手段としてのディクテーション多段階評価手法の検討
金森 理 ((株)ベネッセコーポレーション)
長沼 君主 (清泉女子大学)

[4] 発表 II Development of a Pronunciation Ability/Difficulty Scale Using the Song of
Do-Re-Mi
Tetsuhito Shizuka (Kansai University)

C室 (2101 教室) 司会 中村 優治 (慶応大学)

[5] 発表 I The Dimensionality of the Internal Structure of a Japanese University
English Language Placement Test
Tomoko Fujita (Tokai University)

[6] 発表 II リスニングテスト形式および項目タイプが項目特性に及ぼす影響
平井 明代 (筑波大学)

D室 (2205 教室) 司会 片桐 一彦 (専修大学)

[7] 発表 I 語彙テストから日本語学習者の語彙知識の特徴を探る～広さテストと深
さテストの結果から～

鈴木 秀明 (神田外語大学)
堀場 裕紀江 (神田外語大学)
松本 順子 (神田外語大学)
小林 ひとみ (ヒューマンアカデミー)

10:55～11:05 休 憩

11:05～11:45 研究発表 (発表 30 分, 質疑 10 分) 発表 III

A室 (2102 教室) 司会 織田 敦 (静岡県立掛川西高校)

[9] 発表 III 入試改革 (スピーキングテストを高校入試に導入する場合) と利害関
係者の価値観: 妥当性理論への示唆
秋山 朝康 (文教大学)

B室 (2202 教室) 司会 藤田 智子 (東海大学)

[10] 発表 III 高校教員作成「英語学力テスト」の IRT 分析: 異なる IRT モデルを用
いた場合の項目特性値及び能力特性値の年度間比較
斉田 智里 (茨城大学)

D室 (2205 教室)

司会 **Soo im Lee** (龍谷大学)

- [11] 発表 III テストデータ分析プログラムTDAPとオープンソースのeラーニングソフトウェア moodle で実現したアダプティブテストシステム
秋山 實 (合資会社eラーニングサービス)
今井 新悟 (山口大学)

11:45~11:55 休 憩

11:55~12:20 特別報告：テスト学会の動向
(情報センター棟4階 ウィステリアホール)
JLTA, KELTA, and ILTA
Randy Thrasher (JLTA 会長・沖縄キリスト教学院大学・
国際基督教大学名誉教授)

12:20~13:40 昼 食 (役員会：第一会議室、休憩室：学生食堂)

13:40~15:30 シンポジウム (情報センター棟4階 ウィステリアホール)

入学試験における言語テストのあり方

コーディネーター 兼 パネリスト: 清水 裕子 (立命館大学)

パネリスト: 荘島 宏二郎 (大学入試センター)

杉本 博昭 (伊東市立対島中学校)

織田 敦 (静岡県立掛川西高等学校)

15:30~15:40 休 憩

15:40~17:00 講演 (情報センター棟4階 ウィステリアホール)

司会 島谷 浩 (熊本大学)

紹介 **Randy Thrasher** (JLTA 会長)

演題： 英語学習者はテストをどう見ているか
—データをしながら考察する

Introduction to the Teaching of Test Literacy

講師： 渡部 良典 (秋田大学)

17:10～17:35 総 会 (1503 室)

議長選出

報告 中村 洋一 (JLTA 事務局長・常磐大学)

17:35～17:45 閉会行事 (1503 室)

18:00～19:40 懇 親 会 (藤枝エミナース 富士の間)

司会 Soo im Lee (龍谷大学)
藤田 智子 (東海大学)

展示協賛企業

合資会社 e ラーニングサービス

英語運用能力評価協会

株式会社 トムソンコーポレーション

株式会社 教育測定研究所

The 9th JLTA Annual Conference

Place Faculty of Information Studies,
Shizuoka Sangyo University (Fujieda Campus)

Date September 3 (Saturday), 2005

Reception (8:40-) [Wisteria Hall, Information Center Tower]
Opening Ceremony (9:10-9:25) [Wisteria Hall, Information Center Tower]

Presentation I & II

- Presentation I (9:30-10:10)
- Presentation II (10:15-10:55)
 - Room 2102 (A) Papers 1 & 2
 - Room 2202 (B) Papers 3 & 4
 - Room 2101 (C) Papers 5 & 6
 - Room 2205 (D) Papers 7

Presentation III (11:05-11:45)

- Room 2102 (A) Paper 9
- Room 2202 (B) Paper 10
- Room 2205 (D) Paper 11

Special Report: JLTA, KELTA, and ILTA (11:55-12:20)
[Wisteria Hall, Information Center Tower]

Lunch Break (12:20-13:40)

Symposium (13:40-15:30) [Wisteria Hall, Information Center Tower]

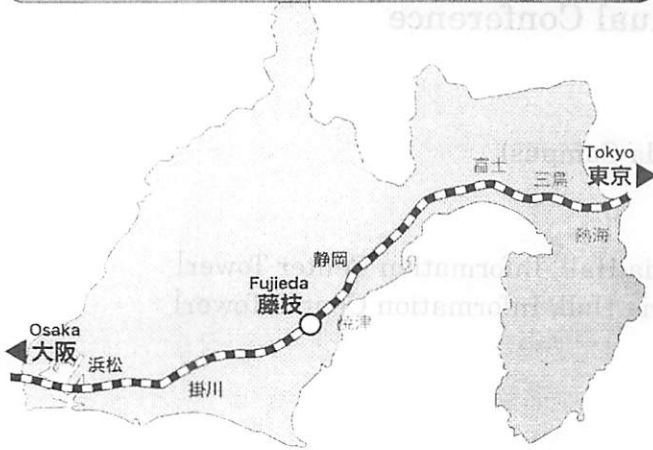
Lecture (15:40-17:00) [Wisteria Hall, Information Center Tower]

General Assembly (17:10-17:35) [Wisteria Hall, Information Center Tower]

Closing Ceremony (17:35-17:45) [Wisteria Hall, Information Center Tower]

Party (18:00-19:40) [Fujieda Eminence Hotel]

Osaka ▶ Fujieda ◀ Tokyo



ShinOsaka 新大阪	Hamamatsu 浜松	Kakegawa 掛川	Fujieda 藤枝駅	Shizuoka 静岡駅	Tokyo 東京駅
新幹線ひかり 約90分	新幹線こだま 約12分	東海道本線 約27分		東海道本線 約20分	新幹線ひかり 約70分

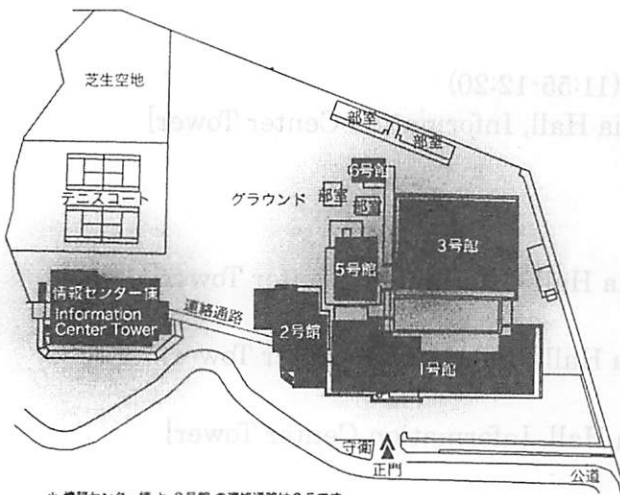
Fujieda ▶ Shizuoka Sangyo University



JR 藤枝駅 (北口) 1 番乗場より、静鉄バス「藤枝エミナース」行き
又は、「藤枝市立総合病院」行き
又は、タクシーで約 10 分

静岡産業大学

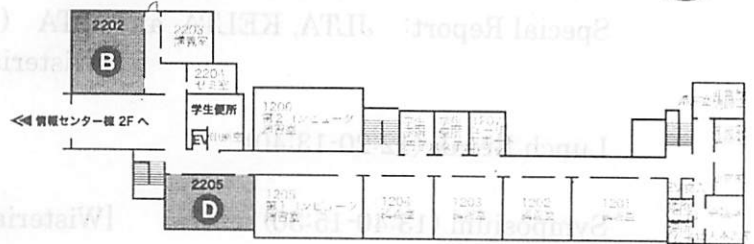
第9回大会会場 静岡産業大学校内 マップ



* 情報センター棟と2号館の連絡通路は2Fです。

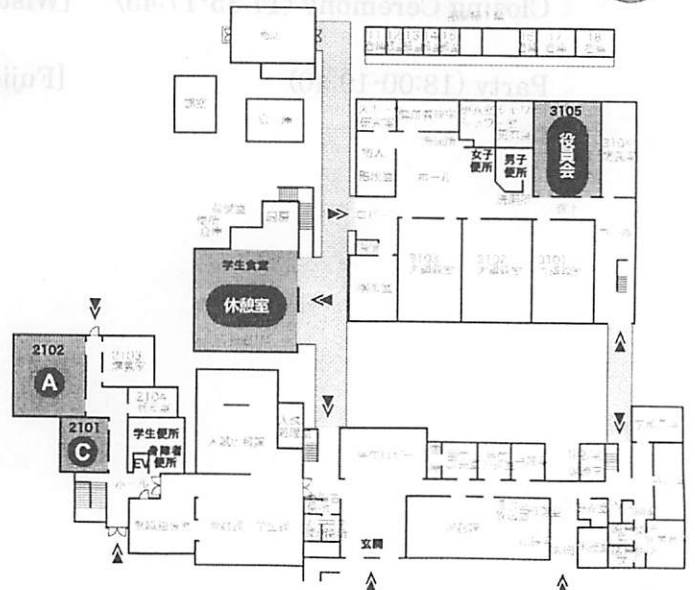
1~6号館

2F



1~6号館

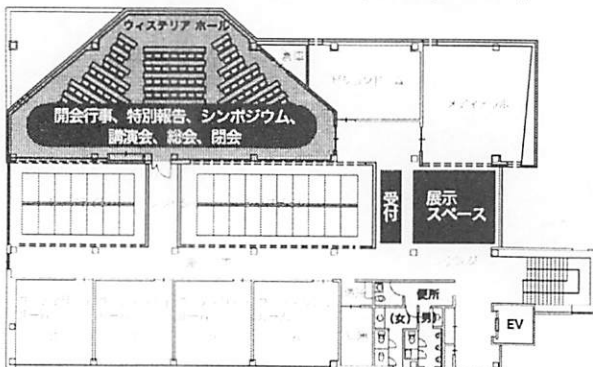
1F



情報センター棟 Information Center Tower

4F

Outside of the Wisteria Hall : Reception & Exhibition
The Wisteria Hall : Opening Ceremony, Special Report, Symposium, Lecture, General Assembly, Closing Ceremony



●学会会場(静岡産業大学藤枝キャンパス)近郊交通アクセス

○JR 東海道本線「藤枝駅」より静岡鉄道バス(1番乗り場、片道200円、所要時間約10分)

①「藤枝エミネンス」行き乗車、「藤枝市立総合病院」下車徒歩2分、または「静岡産業大学」下車徒歩1分(エミネンスに行かれる方は終点下車)

②「藤枝市立総合病院」行き乗車、終点「藤枝市立総合病院」下車徒歩2分(エミネンスに行かれる方は、終点からホテル内まで徒歩10分強)

③藤枝吉永線(追分<おいわけ>経由)の「藤枝市立総合病院」行き乗車、「静岡産業大学」下車徒歩1分(エミネンスに行かれる方は、「藤枝エミネンス入り口」下車で坂を5分ほど登るか、「静岡産業大学」下車徒歩10分)

○JR 東海道本線「藤枝駅」よりタクシー(約6,7分、約1,100円)

○国道1号線藤枝バイパス谷稲葉<やいなば>I.C.より車で5分、東名高速道路焼津I.C.より車で約20分

**Access to the Fujieda Campus of Shizuoka Sangyo University
(within and around Fujieda)**

*Fujieda Railway Station→Shizuoka Tetsudo Bus (Departing from Bus Stop No. 1; single fare: 200 yen; duration: about 10 minutes)

There are three types of buses available:

- 1) bound for Fujieda Eminence, off at Fujieda Municipal Hospital, two minutes walk to the campus (If you head for the Fujieda Eminence Hotel, the final stop is your destination.)
- 2) bound for Fujieda Municipal Hospital, off at the final stop, two minutes walk to the campus (a little more than ten minutes walk to the Fujieda Eminence Hotel)
- 3) bound for Fujieda Municipal Hospital via Oiwake (Fujieda-Yoshinaga Line), off at Shizuoka Sangyo University, 1 minute walk to the campus, ten minutes to the Fujieda Eminence Hotel.

*Fujieda Railway Station → taxi (6-7 minutes, about 1,100 yen)

*Route No.1 Fujieda Bypass, exit at Yainaba I.C., five minutes drive to the campus.

*Tomei Express Highway, exit at Yaizu I.C., twenty minutes drive to the campus.

●藤枝エミネンス(懇親会場/役員宿泊ホテル)

〒426-0078 静岡県藤枝市南駿河台6-1-1 (キャンパスまで徒歩約10分)

シングル6,814円(国民年金被保険者は5,775円)

TEL (054)645-1717

FAX (054)645-1779

<http://www.f-eminence.com/index.html>

発表要旨 (ABSTRACTS)

講演

英語学習者はテストをどう見ているか —データを見ながら考察する

Introduction to the Teaching of Test Literacy

渡部 良典 (秋田大学)

いわゆる Use-oriented Testing (テスト使用に重点をおいたテスト研究) の考え方の一端を紹介します。近年この分野の研究が少しずつ行われるようになってきています。その結果、教育・学習上に役に立つテストということになりますと、信頼性・妥当性の高いテストがあるということでは十分ではなさそうだということが明らかになりつつあります。いわゆるコミュニカティブ・テストを使ったからといって、そのための準備指導や準備学習がコミュニカティブになるという保障はなさそうです。テストそれ自体の教育効果というのは極めて限られたもののようです。

好ましい教育効果・学習効果を上げるためには、テスト細目を作成してそれを公にする、カリキュラムにおけるテストや評価の位置づけを明示するなど多くの条件を整える必要があります。中でもテスト使用者、テスト受験者、テスト作成者がテストを理解する、すなわち test literacy (テストイングの実践的知識・使用能力) が必要となると考えます。そのために本学会の会員の方々とともに、私自身も機会が与えられるたびに日々努力しているつもりですが、微力にしてなかなかうまくいきません。

本講演では、私がこれまで少しずつ集めてきた、テスト受験者がテストをどう捉えているか、を示すデータをお目にかけます。対象は中学生、高校生、大学生です。私の勤務する秋田大学教育文化学部では、新入生 (つまりテストを専門としない学生) を対象に一時間だけテストに関する授業を行う機会があります。大学生については、この授業の一旦を紹介します。このコースでは「自作テストを作成しそれを実施してコメントを加える」という課題を与えています。この結果もあわせて紹介します。

教育評価で夙に著名な W. James Popham に Testing! Testing! : What Every Parent Should Know About School Tests という秀逸な一冊があります。私がお話することは足元にも及ばないものだと重々承知していますが、この本の目指すところを同じくする一人の研究者そして教員として、むしろデータを見ながら皆さんとどのようなテストイング教育が必要なのかを考えてみる、これが本講演の主旨です。

シンポジウム

入学試験における言語テストのあり方

コーディネーター 兼 パネリスト: 清水 裕子 (立命館大学)

パネリスト: 荘島 宏二郎 (大学入試センター)

杉本 博昭 (伊東市立対島中学校)

織田 敦 (静岡県立掛川西高等学校)

入学試験という High Stake なテストに何らかの形で関わっている 4 名が、それぞれの立場から、日本の教育風土における<入試>やその下位テストのひとつである英語テストおよびその波及効果などに関する話題を取り上げ、「入学試験における言語テストのあり方」を考えていく。

テストで国の未来を拓け

荘島宏二郎 (大学入試センター)

テストは、構成概念 (学力や心理変数) の測定器具として人材選抜や教育評価の諸場で重要な役割が与えられている。しかし、その精度は高くない。身長計が、身長を高い者から低い者にほぼ間違いなく並び替えることができることを思えば、テストが学力の高い者から低い者に並び替えていることの精度の低さは目を覆うばかりである。とはいえ、テストは、妥当性と信頼性を満たせばよいというものではない。

テストには、社会的機能がある。我が国を運営する人材は、一般にテストによる選抜を勝ち抜いてきた者たちである。テストの実務家は、自らの作成したテストによって選抜された者たちが、当該コミュニティにおいて重要なポストにつく可能性について無自覚であってはいけない。

本発表では、テストによる国づくりについて、アドミッションポリシー・AO 入試・センター試験リスニングテスト・医師国家試験・国の将来像などをキーワードにしながらかえていく。

高校入試の波及効果：誰に、どの程度？

杉本博昭（伊東市立対島中学校）

高校入試の試験問題の与える波及効果は大きいと言われているが、これは地域（都道府県）によって異なっている。「調査書」が合否に大きな役割をもっている地域では、調査書の基礎資料となる、定期テストや実力テスト等の問題形式も生徒の学習方略に影響を与えると考えられる。また、入試のもつ波及効果は、生徒だけでなく教える側であるわれわれ教師の側にも発生する。それは学校の教師のみならず塾の教師にもである。そこで、本発表では、高校入試を終えた中学3年生（約100人）に定期テスト、県下一斉の実力テスト、入学試験（公立、私立）の各テストに対する意識とそれらに対する勉強法についてアンケート調査を実施し、それを基礎に各テストが生徒に与える波及効果について報告する。また、本調査は生徒の多くが実際は学校の授業時間よりも「塾」での学習時間が多いことを鑑みて、塾での学習内容や学習時間も調べることによって、どのように生徒に波及効果が表れているのかを実際の生徒の成績との関連も考慮して、論じてみたい。

センター試験リスニングテスト導入が高校生の 英語学習に与える波及効果

織田 敦（静岡県立掛川西高等学校）

2006年度より、センター試験においてリスニングテストが実施される。配点は50点と少ないが、全国一斉に実施されることによる影響はかなり大きいと思われる。試行テストの形式に沿った問題集が各社から出版され、また、河合塾などのセンター模試においてリスニングテストが独立して行われるようになるなど、高校3年生の英語学習をめぐる状況は昨年までとずいぶん異なっている。それぞれの学校で、今までとは異なる取り組みがなされ、生徒もリスニングテストを意識した学習を始めていると思われる。そこで、第1回のリスニングテストを受験することになる、高校3年生数百人にアンケートを行い、リスニングテストに対する意識を調査する。また、「聞く力」を伸ばすための学習方法や、学習時の意識についても調査する。調査結果を通じて、センターリスニングテストが高校生の英語学習に与える波及効果を検証し、今後の指導のあり方について考察してみる。

多様な入試と多様な英語力の中で

清水裕子 (立命館大学)

入学者に対して英語科目の履修を課している大学がほとんどだと思われるが、「学生の英語力が落ちてきた」という声に加えて、「学生間の英語力の差がありすぎる」という英語教員の声は、今まで以上に耳にするようになってきた。大学生の英語力の二極分化を実感している方も多いことであろう。特に私立大学においては、入学者の選抜方法が多岐にわたり、入学試験を通じて共通の尺度による英語力の測定をすることが不可能であり（英語テストを課さない入試形態をとっているケースもある）、当該テストとその受験者に依存した結果を基にして入学者が決定されている。そこで、多様な英語力をもつ入学者に対応する一方法として、入学後に統一的な英語テストを実施して学習者の力を把握したり、水準別のクラス編成のための資料としている機関も多くでてきている。本発表では、選抜の多様性と統一的なテストの実施例を紹介すると共に、現在、大学の教育現場や実社会で広く活用されている英語テストの導入例にも触れながら、言語テストのあり方を考える。

[1] Increasing the Relevance of the TOEIC Scores to the School Curriculum

Soo im Lee (Ryukoku University)

Kiyomi Yoshizawa (Kansai University)

The overall purpose of the present study is to explore the content validity of TOEIC (Test of English for International Communication) and content specifications in relation to the test-takers' knowledge before and after school admissions. This study particularly aims at illuminating the validity of TOEIC for discriminating among high and low language proficiency test-takers at Japanese university levels and the relevance of the test scores to the school curriculum. The test-takers were asked to fill out a short questionnaire requesting their judgment of the relative difficulty in solving questions. The features of the test items that lead the test-takers to "wrong answers" were scrutinized and the word level, grammar complexity, and question types of these items were examined.

TOEIC scores are used as a norm-referenced test to rank each student with respect to the achievement of others in broad areas of English knowledge and to discriminate between high and low achievers. This study suggests an approach of analyzing the test takers' performance in TOEIC to achieve the following two pedagogical objectives; (a) to help the teachers feel greater confidence in the comparative information and (b) to increase the relevance of the score analysis to the school curriculum or some specific lesson plans. The effective analysis of the test scores can fill the gap between the comparative reports of the norm-valid test and the actual achievement that teachers should be interested in. If teachers focus on the improvement of the learners' test performance on specific test items instead of focusing on the increase of test scores only, the relevance of TOEIC to the school curriculum or lesson plans will be more meaningful.

[2] Clothes Make the Man (A Viewpoint of a Lifelong English Learner)

Michihiro Hirai (Kanagawa University)

The TOEIC® has now attained a nearly de facto standard status on Japan's English test scene, especially in industry. While it has a reputation for excellent reliability and utility, it also has some weaknesses, particularly in terms of skills scope (limited to passive skills as opposed to active skills), domain (not adequately covering business English), and linguistic depth (not testing the candidate's linguistic knowledge and skills to sufficient extent and in sufficient depth). If it is used as the only means of skills and progress assessment during an extended course of learning without being supplemented with appropriate means designed to offset such weaknesses, the learners would end up with grossly unbalanced skills profiles skewed toward passive skills only, a phenomenon the author calls the "clothes make the man" syndrome. The extensive use of any particular test as the primary means of assessing the achievement and progress of a language learner would necessarily lead him/her to design or choose his/her study program to maximize his/her scores on that test, which would in effect mold his/her skills profile into the assessment profile of the test over time. In this respect, the choice of a balanced English test as the primary means of skills assessment is of critical importance to the fostering of balanced skills profiles.

[5] The Dimensionality of the Internal Structure of a Japanese University English Language Placement Test

Tomoko Fujita (Tokai University)

About 6,000 students enrolled in a university language program took a 100-item multiple-choice placement test which had three subtests, Grammar ($k = 30$), Listening ($k = 30$), and Reading ($k = 40$). The Listening subtest was divided into two subsections, short conversations ($k = 20$) and long lectures ($k = 10$). In order to examine the dimensionality of the internal structure of the test and its subsections in terms of their relationships with each other, a correlational analysis and a principle component analysis (PCA) were conducted.

Both correlational analysis and PCA results indicated that the relationship between Grammar and Reading subtests was the strongest. This may have occurred primarily for two main reasons. First, the examinees were required to read and comprehend a short sentence in order to answer each question on the Grammar test; thus, the Grammar subtest measured the examinees' reading skills to some degree. Second, the reading passages required some level of grammatical knowledge if students are to understand the meaning of the passage and answer the comprehension questions; thus the Reading subtest is an indirect measure of the examinees' grammar skills. On the other hand, Listening requires different underlying competencies such as the on-line processing. The longer lecture section of the Listening subtest correlated more strongly with the Grammar and Reading subtests than the short conversation section did. For the longer lecture, the examinees were required to listen to and remember longer texts, and the sentence structures which were more complex in the longer lectures required strategies that were similar to reading strategies.

[6] リスニングテスト形式および項目タイプが項目特性に及ぼす影響

平井 明代 (筑波大学)

採点の効率性から、ほとんどの標準テストは4肢選択法が使用されている。同様に筑波大学の検定試験(筑波英語検定試験)も同じ形式をとっているが、限られたテスト時間で、全学生のレベルを測定しなければならず、かなり厳選された質の高い問題が必要になっている。しかし、レベルの高い学生は、4肢選択問題では全問正解となりやすく、彼らのリスニング能力の上限が確定できないという問題が起こっている。逆に、難しいリスニングテキストを用いると、レベルの低い学生は、あてずっぽうで答える確率が高くなる。もう一つの課題は、選択形式ゆえに、学生たちは、テスト対策として、限られた時間に答えを記述して正確に解答するという努力をしないと言うマイナスの波及効果(washback effect)をもたらしているのではなかということである。そこで、予備実験として、リスニングテスト項目を記述式問題にした場合に、項目困難度および弁別力が、どの程度向上するかを調査した。また、その項目がどのようなリスニング能力を測定しているかという項目タイプが、項目困難度、弁別力とどのように関係しているかも調べた。最後に、限られた項目数でできるだけ幅の広いレベルをカバーできるリスニングテストを考察する。

[7] 語彙テストから日本語学習者の語彙知識の特徴を探る～広さテストと深さテストの結果から～

鈴木 秀明 (神田外語大学)

堀場 裕紀江 (神田外語大学)

松本 順子 (神田外語大学)

小林 ひとみ (ヒューマンアカデミー)

日本語学習者が持つ語彙知識の特徴を詳細に探るために、L2 日本語学習者 86 名と日本語母語話者 46 名を対象に、同一のアイテムを用いて性質の異なる 2 種類の語彙テスト（広さテストと深さテスト）を実施した。調査では日本語能力試験のアイテムとなっている対象語を 48 個（2 級 21 個、1 級 27 個）採用した。語彙の広さテストでは、Nation (2001) の Vocabulary Levels Test を参考に、対象語とその語の定義をマッチングさせる形式の問題を作成した。一方、語彙の深さテストでは、Read (2000) の Depth of Vocabulary Knowledge Test を参考に、対象語と関連する語 (paradigmatic, syntagmatic, analytic) を選ぶという形式を用いた。テスト結果を分析したところ、いずれのテストにおいても、L2 日本語学習者においては対象語の難度(級)における正答率に有意差が見られた。また、広さテストと深さテストの正答率には高い相関があることも分かった。本発表ではこれらの分析結果をもとに L2 日本語学習者の持つ語彙知識の特徴について考察していく。なお、調査で収集した日本語母語話者のデータと L2 日本語学習者のデータの比較を通して、学習者の語彙知識がどのように習得されていくのかについても合わせて見ていく予定である。

[9] 入試改革（スピーキングテストを高校入試に導入する場合）と利害関係者の価値観：妥当性理論への示唆

秋山朝康（文教大学）

この発表はスピーキングテストを高校入試に導入する際の可能性について論じる。具体的には、テストを導入する際の利害関係者（中学生、中学生教諭、高校教諭、文科省、大学教員、教育委員会）からのアンケートやインタビューのデータに基づき下記の2つの研究課題に絞って発表する。1) 高校入試へスピーキングテストを導入する際のそれぞれの利害関係者のテストに対する価値観や態度はどのようなものか、2) 利害関係者は導入された場合の波及効果をどのようになるのかと捉えているのか。

発表の流れであるが、文献研究では、最近の妥当性理論（特に Mislavy, 1996; Mislavy et al., 2002 & 2003; Kane 1992, 2002, 2004）を Messick (1989)の枠組みと比較検討する。次に上記の課題についてそれぞれの利害関係者の立場を明らかにする。主な結果としては、大部分の関係者は、スピーキングテストを実施する場合は実践的な問題（時間・費用・信頼性の確保等々）を指摘した。しかしながら、それらの実践的な問題を解決できたとしても、テストを導入する場合は、利害関係者の様々な価値観（教育的・文化的）が阻害要因となりうることが判明した。すなわち Fullan (2001), Wall (2000), Watanabe (1996 & 2004)らが主張するように、改革（スピーキングテストの導入）は伝統的な価値観と対立し、導入することは難しいという結論が導かれた。最後に、この発表では妥当性を論じる場合、利害関係者の価値を考慮する必要性を議論する。

[10] 高校教員作成「英語学力テスト」のIRT分析：異なるIRTモデルを用いた場合の項目特性値及び能力特性値の年度間比較

齊田 智里 (茨城大学)

「茨城県高等学校教育研究会英語部」は、平成18年度実施の英語学力テストから、IRTを導入したテスト開発を始めた。IRTには様々なモデルが開発されており、受験者数とデータに応じてどのIRTモデルを適用するかは、研究者やテスト開発者にとって、非常に重要な選択の一つであるといえる。

Saida & Hattori (2004)は「茨城県高等学校英語学力テスト」(Saida, 2002)に、2パラメタ・ロジスティック・モデルを適用し、共通項目もなく共通受験者もない過年度実施の英語学力テストを、事後的に等化する方法を提案した。この方法を用いて齊田(2003)は、過去8年間(1995-2002)の英語学力テストを等化した。その結果、旧学習指導要領下で、高校入学時の英語力が年々低下していたことが示された。

本研究発表では齊田(2003)のデータソースを用いて、以下の2点を解析する。

第1に、項目特性値の観点からテストを分析し直し、作題者が毎年同じ難易度にしようと思って作成している学力テストが、実際には困難度や識別力などの点でどの程度異なっていたかを明らかにする。その際等化係数を求めて個別に等化した場合と、同時推定法を用いて一度に等化した場合の項目特性値の違いについても検討する。

第2に、異なるIRTモデル(3PL及び多値型モデル)を適用した場合、能力特性値の経年比較の結果にどのような違いがあるかを検討する。

(付記) 本研究の一部は、平成16年度科学研究補助金(課題番号16903007)、及び平成17年度日本語テスト学会研究助成の援助を受けている。

<引用文献>

- Saida, C. 2002 Validation of Prefectural English Tests for High School Students. *The Japan Language Testing Association Journal*, 5, 129-146.
- 齊田智里 2003 高校入学時の英語能力値の年次推移—項目応答理論を用いた県規模英語学力テストの共通尺度化—. *STEP BULLETIN*, 15, 12-24. 日本英語検定協会.
- Saida, C. & Hattori, T. 2003. Using Item Response Theory to create a common scale for comparing results from large-scale prefectural English proficiency tests. *The Sixth International Conference on English Language Testing in Asia*. 55-74.
- Saida, C. & Hattori, T. 2004. Application of IRT to Prefecture-Wide English Tests. *ELEC BULLETIN*, 111, 56-61, 71. 英語教育協議会.

[11] テストデータ分析プログラムTDAPとオープンソースのeラーニングソフトウェア moodle で実現したアダプティブテストシステム

秋山 實 (合資会社 eラーニングサービス)

今井 新悟 (山口大学)

テストデータ分析プログラム TDAP 2.0 は、大友・中村・秋山によって開発されたが、秋山は、これをオープンソースの eラーニングソフトウェア moodle に移植し、アイテムバンク構築に必要なツールを組み込んだ。さらに、秋山・今井は、言語能力のレベル判定テストを各レベルのレベル判定用ミニテスト群で構成したプレースメントテストをアダプティブに実行するためのモジュールとして moodle に組み込んだ。これらの成果は、全て GPL (General Public License) で公開するので、誰でも自由に使用し、改変し、配布することができる。これによりアダプティブテストが誰でも利用できるものとなった。

本発表では、1) moodle に移植された TDAP の推定値に関する評価、2) moodle に組み込んだアイテムバンク構築ツール (テストアイテム検索ツール、短答形式から多肢選択形式への自動変換ツール、多肢選択形式から Cloze 形式への自動変換ツールなど)、3) 山口大学で実施した日本語クラスのプレースメントテストの結果、5) TDAP の 2 パラメータ化や項目応答理論に基づくアルゴリズムの実装状況などについて述べる。

お 知 ら せ

1. 受付は、情報棟 4 階ウイステリアホール前で行います。
2. 大会参加費は、会員、学生が 1000 円、非会員が 3000 円です。
3. 昼食は、大学近辺で食事ができる場所が少ないため、お弁当を販売いたします。お弁当を希望される方は、事前に法月 (norizuki@ssu.ac.jp)までご連絡いただく (件名:「JLTA 昼食」をお願いいたします)か、当日、受付の際にお申し込みください。なお、当日の注文には数に限りがあるため、あらかじめご了承ください。外食を希望される方は、懇親会会場の藤枝エミナースホテルのレストラン(大学から徒歩 10 分)をお勧めいたします。
4. 懇親会費は 4000 円です。会費は、学会当日、受付でお支払いください。
5. 宿泊の斡旋はいたしませんので、各自でご手配ください。下記に静岡産業大学情報学部 藤枝キャンパス近郊のホテルを紹介いたしますので、参考になさってください。

Notice:

1. Reception: at Wisteria Hall, 4th floor, Information Center Tower (Jouhou-tou).
2. Conference fees: 1000 yen for members and students
3000 yen for conference members
3. Box lunches will be sold at the reception for non-committee members. Please send your order in advance by e-mail to norizuki@ssu.ac.jp. The subject of the message should be 'JLTA lunch'. You can order your lunches at the reception, but please note that the number is limited. Alternatively, you can eat out at the Fujieda Eminence Hotel restaurant, ten minutes' walk from the campus.
4. Conference Party fee: 4000 yen
5. The following is a list of some budget hotels in and around Fujieda, where the conference venue is located. The ones in Yaizu are resort hotels, with a superb view of Mount Fuji and Suruga Bay on a sunny day.

藤枝エミナース 7 ページ参照

藤枝サザンホテル <http://www.33hotel.jp/>

(JR 藤枝駅南口より徒歩 3 分、シングル 6,300 円 (税込み) より)

〒426-0061 藤枝市田沼 1-24-3

Tel 054-636-3300 Fax 054-636-3575

藤枝パークインホテル <http://www.f-parkin.com>

(JR 藤枝駅北口より徒歩 3 分、サービスシングル 5,900 円、シングル 6,700 円 (税込み) より)

〒426-0034 藤枝市駅前 2-12-16

Tel 054-643-4311 Fax 054-643-4908

この他に JR 静岡駅近辺では、ホテルアーバントホテル (静岡駅北口徒歩 5 分、シングル 6000 円(税込み)より) <<http://www.inn.abant.co.jp/>>, ホテルエックシズオカ (静岡駅北口徒歩 5 分、シングル 6000 円(税込み)6,000 円より) (Tel: 054-251-1741) などがあります。

近隣のリゾート風ホテルとしては、富士山と駿河湾が一望できる、焼津市 (藤枝市の隣、JR 焼津駅は静岡駅から 12 分、藤枝駅から 6 分、焼津駅からシャトルバスで約 10 分) のホテルアンピア松風閣<<http://www.sanri.co.jp/shofukaku/>> と焼津グランドホテル<<http://www.sn-hotels.com/ygh/>> などがあります。

cat モジュールと tdap モジュール

eラーニングサービスは、山口大学とCAT(Computerized Adaptive Test)システムの開発に関して共同研究を開始し、留学生の日本語クラスのプレースメントテストに用いる CAT システムを moodle の cat モジュールとして開発しました。このCATシステムは、シンプルなアルゴリズムを採用しているにもかかわらず、実用的なクラス分けが可能です。山口大学とeラーニングサービスは、この cat モジュールをオープンソースソフトウェアとして公開し、教育に貢献します。

さらに、eラーニングサービスは、アイテムバンクを構築するためのツールである tdap モジュールを開発しました。この tdap モジュールは、常磐大学大友賢二・中村洋一先生と共同で開発した TDAP2.0/Win と同等の機能を持ち、PROX 法を用いて項目困難度を推定することができます。これにより、moodle でアダプティブなプレースメントを一貫して行うことができるようになりました。

eLS サポートサービス

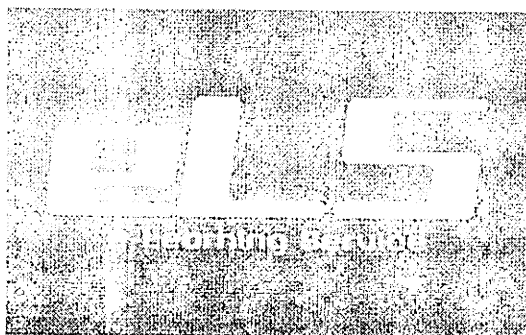
eラーニングサービスは、7年に亘るeラーニングの経験を元に皆様をサポートいたします。

- ・ 導入前にeラーニングをどのように展開していけば良いかをコンサルトします
- ・ 導入時に moodle の稼動環境を構築し、導入講習会またはワークショップを実施します
- ・ 先生方、学生へのヘルプデスクサービスを提供します
- ・ 個々の先生方のご要望に合わせてコースのテンプレートを作成します
- ・ 先生方がコースを作成する際に、そのお手伝いをします
- ・ ご要望に合わせて、moodle のモジュール等をカスタマイズ、あるいは、新規開発します
- ・ ご要望に応じて、moodle のコンテンツを開発いたします

eLS のお勧めメニュー

eラーニングをこれから始める先生方にお勧めするサポートサービスです。少ない予算でしっかりしたサポートを提供いたします。

- ・ レンタルサーバで moodle を提供します(消費税込:58,800 円/年)
- ・ moodle サーバの管理をすべてお手伝いいたします(消費税込:126,000 円/年・台)
- ・ moodle を使用する上でのトラブルに緊急対応いたします(消費税込:126,000 円/年・サイト)
- ・ moodle を使いこなす実習中心のワークショップを行います(消費税込:94,500 円/日)
- ・ 教員・学生の質問に迅速に回答します(消費税込:12,600 円/年・教師ユーザ)
- ・ オンラインテストを使いこなす実習中心のワークショップを行います(消費税込:94,500 円/日)



合資会社 eラーニングサービス

〒901-2122

沖縄県浦添市勢理客4-13-1

沖縄産業振興センター505号室

電話 098-875-7477

ファクス 020-4668-0221(電子メールへ転送)

E-Mail akiyama@e-Learning-Service.co.jp

Home Page <http://www.e-Learning-Service.co.jp>



英語でどれくらい 話せますか？



実践的な
英語力を
数分で判定！

電話で受験できる完全自動の口頭英語テスト



PhonePass

PhonePassの特長

●いつでも、どこでも受験可能

オフィスで、ご家庭で手軽に口頭英語テスト。電話のある場所なら、時間も選ばず、受験者個々の都合に合わせてテストが受けられます。

●スピーディな判定

高度な音声認識システムを使い即時にわかる自動判定。しかも、判定結果は精度が高く客観的です。

●高いコストパフォーマンス

企業の入社試験や人事考課におけるテストなど、PhonePassなら会場設営も不要、何よりも受験者の時間的拘束が最大10分。つまり人件費ロスが最小限で済みます。

THOMSON



トムソンコーポレーション株式会社
トムソンラーニング

Home Page: <http://www.phonepassjapan.com>

お問い合わせは

ハナシ テスツ

☎ 0120-874-102